

# 「イナバノシロウサギ」異伝考

石 破  
(国文教室) 洋

## A Study on A White Hare of Inaba variants of the legend

Hiroshi ISHIBA

Keywords : Inaba no Shiro usagi (イナバノシロウサギ)

### 一

因幡の白兔説話は『古事記』(和銅五年 $\rightarrow$ 七二二 $\rightarrow$ 成立)によって周知のところであるが、『古事記』の他にも『先代旧事本紀』巻四(著者未詳)成立は平安初期、遅くとも延喜初年 $\rightarrow$ 九〇一 $\rightarrow$ とされる。ただし、本書の所伝は『古事記』による、『塵袋』第十(積良胤の著か。文永十一年 $\rightarrow$ 一二七四 $\rightarrow$ —弘安四年 $\rightarrow$ 一二八二 $\rightarrow$ の成立。『因幡ノ記』なるものを引く)、積氏某比丘編の『塵添瑩囊鈔』卷二(天文元年 $\rightarrow$ 一五三二 $\rightarrow$ 成立。『塵袋』を引く)、今井似閑編『万葉緯』卷十八(享保二年 $\rightarrow$ 一七一七 $\rightarrow$ の成立か)、本居宣長『古事記伝』卷十(卷十の浄書終了は安永三年 $\rightarrow$ 一七七四 $\rightarrow$ 七月二十三日。『塵添瑩囊鈔』を引く)、平田篤胤、『古史伝』卷十七(神代部の成稿は文政八年 $\rightarrow$ 一八二五 $\rightarrow$ 。『塵添瑩囊鈔』を引く)などがある。

また、郷土の著としては、因幡地方最初の史誌『因幡民談記』卷八(江戸初期の代表的な郷土史家小泉友賢 $\rightarrow$ 一六二二—一六九一 $\rightarrow$ の著。貞享五

年 $\rightarrow$ 一六八八 $\rightarrow$ の成立とされる。『塵添瑩囊鈔』を引く、『民談記』と並び江戸時代における因幡の地誌の双璧とされる安陪恭庵『稲羽志』歴世考(恭庵 $\rightarrow$ 一七三四—一八〇八 $\rightarrow$ は藩医。寛政七年 $\rightarrow$ 一七九五 $\rightarrow$ 成立。時に恭庵六十一歳。『旧事紀』を引く)に所伝が存する。

これらは全て『古事記』あるいは『塵袋』所引『因幡ノ記』を出所とする因幡の白兔説話であるが、白兔説話は伯耆国にも存し、また、隠岐国にも存している。本稿では右の多くの所伝とはまた別の因幡の白兔説話について述べる。

### 二

現鳥取県八頭郡こおけ郡家町下門尾に存する成田山青龍寺(城光寺教進住職)に所蔵する写本に『花喜山城光寺縁起』がある。『城光寺縁起』は楮紙を継いだ料紙を巻いて保存せられており、簡単な軸装になっている。筆はて

いねいとはいえないが、暢達の速筆である。題簽等はなく、『城光寺縁起』のタイトルは仮題である。その『城光寺縁起』に次のごとく見えている。

抑山陰道因幡国八上郡土師ノ郷門尾村中山花喜山城光寺ト申ハ行基菩薩の開基也本尊観世音薩埵則和銅年中行基此山に來リ給へ自一刀三礼の尊像を彫刻して草堂に安置し後年必知識來テ法を弘へしと宣ひ當國を去リ給ふとかや其後慈惠大師遺跡を繼て伽藍を建立し然テ世降て戰爭に属し此地も復天正の兵乱に厄せられ記録傳來の什物等烏有ト成其灰燼の余リに古記壹卷を得て

往古大日靈尊此山に降臨あらせられ國郡を安撫して此山の絶頂に行宮を營しめん迎四方を眺玉ふ折柄白兔頭レ尊の御装束の裾を嚙へ道知るべしける尊其白兔の道知るべせし方へ御幸在して中山の尾統き遙西の方石二ツ有其處へ誘ひける其所へ行宮を營ミ暫く止リ給ひき今其石を皇后の石と唱ふ其地を伊勢か平といへるも此故ならむ其天降らせ給へる時道しるべせし白兔見へざりし尤白兔は月読の尊の神鉢なれハ其後はを道祖白兔大明神と云ならわし祀神として此中山尾統<sup>キ</sup>四ヶ村の氏神と崇む又中山西の表半場成處に石有尊其石の上に冠を遺し給へり則神の御冠石なり是も又神秘の方便にして尊の神鉢とも仰貴むべき迎今神子石と云は畧語なり土俗に烏帽石といふも其縁にして中山の西表を靈石山と号しけるは全く此石を表せり道しるべせし故道祖神在り夫々尊東の方へ去ル因幡但馬の國境高山を越去給ふ其時草木枝葉旭に照映していと々美敷尊日枝の山とは宣ひき<sup>今八東郡に有り</sup>約ノ山往古ハ八上郡也 上れる神の代の春けき跡夫とも今に其山を伊勢詣の還つ道とする事國人ハ更なり遠ふき國々迫其古事伝りける也擬又應神天皇征西の時此地に幸臨成て此山八國の中央に在リ因て中山と号し時に應神天皇の御制に

因幡なる神の神子石驗あらは過行人の道知るへせよ

斯詠せられけるも天皇天祖の行宮營しめ給へける石を見玉ひて詠せられける此地を震居とし給ひ夫々専ら當山本尊御信仰有(下略)

右の『縁起』は墨界内に書写せられているが、その墨界外の巻頭余白に、貞元五年<sup>二</sup>改正有しを亦正應<sup>三庚寅</sup>改正し後天正三乙亥年改正し此度書添世代して安政五<sup>戊午</sup>年<sup>二</sup>書写し置

と記す。「貞元」は元年(九七六)と二年(九七七)のみで五年は無い。

あるいは、貞觀五年(八六三)の誤りか。いずれにせよ、これらの年紀がどの程度信用の置けるものであるか不安があり、「改正」の意味するところも明らかではない。また、巻頭余白のこのような記述も異例であり、不審を抱かしめる。

城光寺は明治三十五年(一九〇二)龍玉和尚が千葉県成田山新勝寺より成田山不動明王を勧請し、成田山青龍寺と号するに至るが、以前は三十六坊の塔頭を有した古刹であったという。本尊は聖觀音菩薩。脇侍の持国天多聞天は重要文化財として知られ、持国天の胎内に「正安三年正月二十五日 仏師隆円造」と墨書する由。正安三年は一三〇一年である。『縁起』の所伝はこれを遡ることは困難であるまいか。してみると、『縁起』の巻頭にいう貞觀五年(八六三)、正應三年(一二九〇)、天正三年(一五七五)、安政五年(一八五八)のうち、天正三年、安政五年の年紀については信用できるかもしれない。今のところ、『縁起』の成立は江戸期と見ておくのが無難であろう。

### 三

また、これとは別に、現鳥取県八頭郡郡家町<sup>こおげ</sup>國中に存した慈住寺にも、城光寺とほとんど同文の縁起がある。慈住寺は今元的位置から私都川を越えた向い側に移り、小祠を存して、阿弥陀・薬師・觀音の三仏を安置するのみであるが、『慈住寺縁起』の写本が存し、この写本は郡家町石田百井在住の小島光造氏(一八六四—一九三六。六男は国文学界の重鎮小島憲之博士である)が所蔵していた由である。光造氏は没し、小島家は昭和十一年に鳥取市に居を移しているが、現当主邦彦氏の話によれば、写本は現存しておらず、移転の際に反故と一緒に処分してしまった可能性があるといい、焼失したともいう。

原本は散佚してしまったようであるが、この写本は、幸いにも『八頭郷土文化シリーズ』(三)「慈住寺」(八頭郷土文化研究会、一九五七年八月)に記録せられているので、今それによって記す。

#### 東光山慈住寺記録

抑山陰道因幡国八上郡土師ノ郷中山東光山慈住寺と申は往古行基菩薩

の開基にして本尊薬師如来則和銅年中行基此山に來り給ひ自彼尊像を彫刻して是を学堂に安置して其後最勝寺の薬師城光寺ノ毘盧舍那仏津ノ村密音寺の觀世音菩薩を自作し給ひ当国を去給ふ其節人に語りて曰後必知識在て我が法を可弘と宣ひける果して其後慈惠大師遺蹟を踐て伽藍を建立せられ然るに世降りて戦争に属せしより以來此地も亦天正の兵燹に厄せられ縁記の記録伝来の什物追鳥有と成其灰燼の餘りに得たる物古記一卷有曰

往古大日靈尊此山に降臨あらせられ給ひ郡国を安撫して此山の絶頂に行宮を営しめん迎四方を眺給ふ折柄に白き兔一疋あらわれ尊の御装束の裾を嚙道知るべしける尊其道知るべし方へ御幸御在けるに中山より遙山の尾続きに大石二ツ有其処へ誘ひける此処に行宮を営暫時止らせ給ひ今其石を皇居石と呼び又其処を伊勢が平といへるも此故ならん其天降らせ給へる時道知るべし白兔見えざりける尤白兔は月読尊の神躰なればなり其後道を道祖白兔大明神と云ならわし祀神として此中山の尾続四力村の氏神と崇む亦中山西の面の半場成処に石有尊其石の上に冠を残し置給へり則神の御冠石是なり是もまた神秘の方便にして尊の神射とも仰貴むべき迎今神子石といふは略語なり土俗に烏帽子石といふも其縁の縁にして中山の西の面を靈石山と号するは此石を表せり又靈石山に道知るべし故道祖妻の神とも祀なり従夫大日靈尊東の方因幡但馬の国境成高山を越て去り給へり其時草木枝葉旭に照映して美敷尊日枝の山とは宣き(八東郡に今在俗に豹の山と云)神の世のはるけき跡夫も今に其山を伊勢詣の戻り道とする支国民は更なり遠き国にに迄其古事伝りぬる也扱亦應神天皇征西の時此地に幸臨成る此山は国の中央に在り因茲中山といふ應神天皇御製有

因幡なる神の神子石驗あらば過行人の道しるべせよ

斯詠ぜられるけるも天皇も彼天祖の行宮を営給ひし石を見給ひて詠ぜられけり此地を震居とし給ひ従夫尊当山本尊御信仰有(下略)

右の『縁起』の巻頭には、

嘉永五年

因幡国八上郡中山ノ麓 慈住寺 記録

当住 西明院写

とあった由で、嘉永五年(一八五二)の書写であることが知れる。西明はもとは最勝寺の僧であつたがその後、慈住寺の住職となつたといわれ、小島家とは殊に親しい関係にあつたので、『縁起』の転写本を作製し、小島家に贈つたとされる。『城光寺縁起』にいう安政五年(一八五八)の年紀を六年遡るといふだけでなく、本文も古態を存しており、『城光寺縁起』のごとき表記の誤りや文法上の間違いも少なく、『城光寺縁起』よりは信頼できるであろう。両本はほぼ同文であるが、これについて『稿八頭郡誌』は、

按ずるに慈住寺、城光寺、最勝寺等皆一派なり縁起の一致せる怪しむに足らず

と述べている。しかしながら、異なる寺の縁起が同じということは甚だ不審としなくてはならないであろう。

いずれにせよ、両縁起に見える「白兔」が「古事記の白兔」でないことは明らかであろう。

#### 四

右の二つの『縁起』とは更に別の同文の『縁起』が存した。すなわち、現鳥取県八頭郡河原町片山に存する靈石山最勝寺所蔵の『最勝寺縁起』がそれである。

『最勝寺縁起』は鳥の子の料紙にていねいな筆で書かれた卷子本で桐箱に収められている。桐箱は昭和四十九年に現住職倉信隆源師が作製せられたもので、箱の裏書に同師の筆で「靈石山最勝寺縁起」と墨書してある。軸表題は打つけに「靈石山最勝寺縁起」とあり、本文には線点や傍訓が施されている。ただし、線点や傍訓は冒頭部分のみで、途中からは施されていない。

#### 靈石山最勝寺縁起

因幡の州八上の郡岩田の庄靈石山最勝寺ハ慈惠大師の元三大師開基にして本尊ハ薬師如来行基菩薩の作り給える処なり和銅年中行基此山に來りたまひみつから彼の像を彫刻しこれを草堂に安置して此山を去り給ふ其とき人にかたりてのたまハク

後世<sup>かうせい</sup>必<sup>かならず</sup>知識<sup>ちしき</sup>有<sup>あり</sup>て我法<sup>わがほう</sup>をこゝに弘<sup>ひろ</sup>むと後果<sup>のちがた</sup>して慈惠<sup>じゑ</sup>大師<sup>だいし</sup>遺蹟<sup>いしやく</sup>を踐<sup>ふみ</sup>て伽藍<sup>がらん</sup>を建立<sup>こんりゅう</sup>せらるしかるに世<sup>よ</sup>降<sup>くだり</sup>て戦争<sup>せんそう</sup>に属<sup>しよ</sup>せしより此地<sup>このち</sup>もまた天正<sup>てんしやう</sup>年中<sup>なちゆう</sup>の兵燹<sup>へいけん</sup>に厄<sup>やく</sup>せられ縁起<sup>えんぎ</sup>の記録<sup>きくろく</sup>傳來<sup>くわんらい</sup>の什物<sup>じぶつ</sup>まで皆烏有<sup>みなく</sup>となむぬ其灰燼<sup>かいじん</sup>の餘<sup>あま</sup>に得<sup>え</sup>たるもの古記<sup>こき</sup>一卷<sup>いっくわん</sup>あり今其載<sup>いま</sup>る所<sup>ところ</sup>に據<sup>よ</sup>るにむかし

大日靈女<sup>おほひるめのみこと</sup>尊此山<sup>このみ</sup>に降臨<sup>かうりん</sup>あらせ給ひ郡国<sup>ぐんこく</sup>を安撫<sup>あんぷ</sup>まし／＼て此山<sup>このみ</sup>の絶頂<sup>けつてい</sup>に大石<sup>おおいし</sup>二ツある其処<sup>そのところ</sup>に行宮<sup>ぎやうきやう</sup>を営<sup>い</sup>ましめてはらく止<sup>とど</sup>まらせ給ひぬ今其石<sup>そのいし</sup>を皇居<sup>みやうきよ</sup>石と呼<sup>よ</sup>その地<sup>そのち</sup>を伊勢<sup>いせ</sup>力平<sup>りきへい</sup>といへるもの故<sup>ゆゑ</sup>となむ其あま降<sup>くだ</sup>らせたまえるとき御道<sup>みち</sup>しるへしたまへる神<sup>かみ</sup>を猿田彦<sup>さるたひこ</sup>乃命<sup>のみこと</sup>となむ申<sup>まを</sup>す此山<sup>このみ</sup>にても西面<sup>さいめん</sup>の半腹<sup>はんぷく</sup>なる石<sup>いし</sup>にかの命<sup>のみこと</sup>その冠<sup>かん</sup>を残<sup>のこ</sup>し置<sup>お</sup>きたまへりし即<sup>すなは</sup>神<sup>かみ</sup>の御冠<sup>みかん</sup>石<sup>いし</sup>は是<sup>こゝ</sup>なり是<sup>こゝ</sup>もまた神秘<sup>しんぴ</sup>の方便<sup>はんぺん</sup>にして此石<sup>このいし</sup>を命<sup>のみこと</sup>の神<sup>かみ</sup>躰<sup>たい</sup>とも仰<sup>おほ</sup>きたふとむへしとそ<sup>この</sup>ミこいしハおゝんかふむり石<sup>いし</sup>の略語<sup>りやくご</sup>なり土俗<sup>どふく</sup>ゑほうし石<sup>いし</sup>といふも其縁<sup>そのえん</sup>にして山<sup>やま</sup>を靈石<sup>れいし</sup>と號<sup>なづ</sup>するも此石<sup>このいし</sup>を表<sup>あらわ</sup>せるならし古<sup>ふる</sup>哥<sup>か</sup>に因幡<sup>いんぱん</sup>なる神<sup>かみ</sup>のみこ石<sup>いし</sup>しるしあらは過行<sup>かかう</sup>妹<sup>いも</sup>の道<sup>みち</sup>しるへせよと詠<sup>よ</sup>せるも彼の命<sup>そののみこと</sup>を道祖<sup>みちすそ</sup>神<sup>かみ</sup>といへるによれるにやそれより大日靈女<sup>おほひるめのみこと</sup>尊東<sup>あづま</sup>のかた因幡<sup>いんぱん</sup>但馬<sup>たんま</sup>の界<sup>かゝり</sup>なる高山<sup>こうさん</sup>を越<sup>こ</sup>て歸<sup>かへ</sup>らせ給ひける其時<sup>そのとき</sup>草木<sup>そうぼく</sup>の枝葉<sup>えは</sup>旭日<sup>こくじつ</sup>に照映<sup>しやうえい</sup>していと美<sup>うつく</sup>ハしかりけれハおゝん神<sup>かみ</sup>日枝<sup>ひえだ</sup>の山<sup>やま</sup>とハのたまひき<sup>八東郡に在今土俗</sup> 豹乃山<sup>ひょうのやま</sup>といへるハ是<sup>こゝ</sup>也<sup>なり</sup> 神<sup>かみ</sup>の世<sup>よ</sup>のはるけきあとそれとも今<sup>いま</sup>に其山<sup>そのやま</sup>を伊勢<sup>いせ</sup>詣<sup>よ</sup>のもとつ道<sup>みち</sup>とすること州民<sup>しゅうみん</sup>はさらなり遠<sup>とほ</sup>ッ国<sup>くに</sup>まてそのふること傳<sup>つた</sup>りぬるこそ不思議<sup>ふしぎ</sup>ともいふへけれ又<sup>また</sup>

應神<sup>おうじん</sup>天皇<sup>てんかう</sup>の征西<sup>せいせい</sup>の時<sup>とき</sup>この地<sup>このち</sup>に臨幸<sup>りんきやう</sup>なりて此山<sup>このみ</sup>国の中央<sup>ちゆうかう</sup>にありて最も勝<sup>かち</sup>れたる地のこと天祖<sup>あますそ</sup>の垂跡<sup>すゐしやく</sup>なれハとて古昔<sup>こせき</sup>を追<sup>お</sup>ひ彼の宸居<sup>しんきよ</sup>としたまひ郡国<sup>ぐんこく</sup>を撫綏<sup>ぶゐ</sup>まし／＼けると申<sup>まを</sup>傳<sup>つた</sup>へける(下略)

右の『最勝寺縁起』巻末には、

寛政元年己酉夏 賢蟲十世

沙門 快道 依舊記撰

侍醫 安陪惟親親書

とある。賢蟲は第十七代住職、快道は第二十六代住職である。後に記すように、賢蟲は最勝寺を再建した人物で、その賢蟲から十世後の快道が縁起を撰したのである。安政元年(一七八九)は安陪惟親が親書した年号であろう。

安陪惟親は、すなわち、鳥取藩医安陪恭庵(一七三四—一八〇八)。「因幡民談記」と並び江戸時代における因幡の地誌の双璧とされる『稲羽志』の著者であり、最勝寺住職倉信隆源師の談によると、『稲羽志』執筆のための資料探訪の際、最勝寺を訪れ、自ら親しく縁起を書写したと伝承されている由、今、見るに紛うかたなき恭庵の直筆である。

最勝寺は今(一七八九)は靈石山(三三四メートル)の麓にあるが、もとは中腹に存し、広い寺域を誇っていた。現在、旧寺域の真中を靈石山頂上に通ずる道路が走っているが、歴代住職の墓碑は巨岩を利用した壮大な自然石で、当時の水汲み場も今なお水を存し、その石組みは見事なもので、寺跡は当時の隆盛の様子を今に髣髴せしめる。

その最勝寺は天正九年(一五八一)十月、秀吉による鳥取城攻略の際に灰燼に帰したが、秀吉は因幡平定の後、第十七代賢蟲に再建を命じ、堂宇を建立せしめた。その後、昭和十四年五月に焼失、この時からうじて本尊の薬師如来と縁起を炎の中から運び出したといい、縁起を収めてあったもの箱も最勝寺に残されている。

靈石山の由来は『縁起』にも記されているが、靈石山は最勝寺山とも称され、『縁起』に見える「神の御冠石」は「神の御子石」と呼ばれて現存する。

## 五

右の『最勝寺縁起』『慈住寺縁起』『城光寺縁起』の三本を比較してみよう。

三本共にほとんど同文とはいいながら、大日靈女尊の道しるべをした神を「猿田彦」(『最勝寺縁起』)から「白兔」に変更した『慈住寺縁起』と『城光寺縁起』は、残した冠を白兔の冠とすることができなくて、猿田彦の冠でなく、女尊の冠に変えざるを得なかったし、古歌を女尊の御製とするなど、内容的にも異同を存している。しかも、三本ともに、天正の兵火の中より残った古記一卷によるといのであるから、三本の原となるものは一つであったことになる。その記述も、

其灰燼の餘に得たるもの古記一卷あり今其載る所を據るに

(『最勝寺縁起』)

其灰燼の餘りに得たる物古記一卷有曰

(『慈住寺縁起』)

其灰燼の餘りに古記壹巻を得て

(『城光寺縁起』)

とあり、更に、

最勝寺縁起	慈住寺縁起	城光寺縁起
遺蹟を踐て	遺蹟を踐て	遺蹟を繼て
天正年中の兵燹	天正の兵燹	天正の兵乱
皇居石と呼	皇居石と呼び	皇后の石と唱ふ
猿田彦乃命	白き兎	白兔
西面の半腹	西の面の半場	西の表半場
ゑほうし石	烏帽子石	烏帽子石
古キ哥	應神天皇御製	應神天皇の御制
過行妹	過行人	過行人
旭日に照映して	旭に照映して	旭に照映して
州民	国民	国人

などを見れば、三本の原なるものは『最勝寺縁起』であり、『最勝寺縁起』によって『慈住寺縁起』が書かれ、その『慈住寺縁起』を見て『城光寺縁起』が写されたものであらうと考えられる。すなわち、

『最勝寺縁起』→『慈住寺縁起』→『城光寺縁起』

の順である。

『慈住寺縁起』を書写した「西明」なる人物は、もとは最勝寺の僧であつたとされるから、西明が『最勝寺縁起』を転写する機会は十分に存したであらう。思うに、最勝寺第二十六代快道が撰した縁起を安陪恭庵が書写し

た現存本『最勝寺縁起』を、慈住寺の住職となつて転出した西明が、慈住寺の縁起が存しないのを遺憾とし、『最勝寺縁起』の冒頭一行目を自寺の慈住寺の文字に変え、慈住寺の縁起としたのであらう。『城光寺縁起』はその慈住寺本を書写して、冒頭部の寺名を城光寺に変更し、城光寺の縁起としたのである。けだし、城光寺にもまた縁起がなかったからであらう。

『城光寺縁起』は仮題であり、『慈住寺縁起』も正しくは「古里山慈住寺縁起」と記されている。「縁起」とせず「記録」としたのは、あるいは、筆者西明の慮りを示しているのかもしれない。

## 六

ところで、『縁起』にいう「大日靈尊」「大日靈女尊」は天照大神の別称。『日本書紀』神代、上、第四段に「大日靈貴」(おほひるめのむち)、同第五段一書第一に「大日靈尊」など見える。『最勝寺縁起』によれば、この天照大神が靈石山に降臨した際、道しるべした神は猿田彦であつたという。猿田彦はいうまでもなく、天孫ニギノミコト降臨の折、道しるべした神であり、『古事記』上巻に、

爾に日子番能邇邇云命、天降りまさむとする時に、天の八衢に居て、上は高天の原を光し、下は葦原中国を光す神、是に有り。故爾に天照大御神、高木神の命以ちて、天宇受賣神に詔りたまひしく、「汝は手弱女人にはあれども、伊牟迦布伊より布までは音を以るよ。と面勝つ神なり。故、専ら汝往きて問はむは、『吾が御子の天降り為る道を、誰ぞ如此て居る』ととへ。」とのりたまひき。故、問ひ賜ふ時に、答へ白ししく、「僕は国つ神、名は猿田毘古神ぞ。出で居る所以は、天つ神の御子天降り坐すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとして、参向へ侍ふぞ。」とまをしき。(岩波大系本の訓読文による)

とあり、『書紀』神代、下、第九段の一書第一には、已にして降りまさむとする間に、先驅の者還りて白さく、「一の神有りて、天八達之衢に居り。其の鼻の長さ七咫、背の長さ七尺餘り。當に七尋と言ふべし。且口尻明り耀れり。眼は八咫鏡の如くして、絶然赤酸醬に似れり」とまうす。即ち従の神を遣して、往きて問はしむ。

時に八十萬の神有り。皆目勝ちて相問ふこと得ず。故、特に天鈿女に勅して曰はく、「汝は是、目人に勝ちたる者なり。往きて問ふべし」とのたまふ。天鈿女、乃ち其の胸乳を露にかきいでて、裳帯を臍の下に抑れて、咲嘆ひて向きて立つ。是の時に、衢神問ひて曰はく、「天鈿女、汝為ることは何の故ぞ」といふ。對へて曰はく、「天照大神の子の所幸す道路に、如此居ること誰ぞ。敢へて問ふ」といふ。衢神對へて曰はく、「天照大神の子、今降行すべしと聞く。故に、迎へ奉りて相待つ。吾が名は是、猿田彦大神」といふ。時に天鈿女、復問ひて曰はく、「汝や將我に先だちて行かむ。抑我や汝に先だちて行かむ」といふ。對へて曰はく、「吾先だちて啓き行かむ」といふ。

（岩波大系本の訓読本による）  
とある（なお、逸文『伊賀国風土記』にも「猿田彦神」の名が見える）。

現在、日本各地の神社の祭祀において、神輿渡御の際にその先導をする鼻高赤面の神を象徴した面を着する人物が登場するのは、右の故事に由来する猿田彦を嚮導（道案内）の神とする信仰による。道を照らして先導したことから道祖神の信仰にも通じ、道の辻に祀られたりしているわけである。

したがって、『最勝寺縁起』が天照大神を猿田彦が道案内したと記すのは、けだし、もともとの記述であったはずであろう。しかるに、『慈住寺縁起』や『城光寺縁起』はなにゆえに猿田彦を白兔へと書き変えて、『古事記』の所伝とは別の、因幡の白兔伝承を生み出したのであろうか。

## 七

霊石山を中心とする中山の西面麓の村々には、古くから白兔伝承が存していた。すなわち、江戸初期の代表的郷土史家・鳥取藩医小泉友賢（一六二二—一六九一）が著した因幡地方最初之地誌『稲葉民談記』<sup>1</sup>（貞享五年へ一六八八）の成立とされる）巻十四「神社之部 当国郡中村々本社氏神記」（八上郡の条）に、

土師百井 大免—— 福本用  
福本 大免——

（中略）

池田 大免——

と見える（原表記「大免」。「免」字は諸写本「免」「免」「免」「免」などに作るが、以下、これらは「免」に統一して表記し、「免」「免」は「免」と表記する。この他の特殊な「免」字は原表記のまま記す）。

また、現鳥取市白兔に存する白兔神社については『民談記』巻十四「神社之部」（高草郡の条）に、

内海 大免——  
と記す。

「土師百井」の条に「福本用」とあるのは、「福本村の氏神を用いて祀る」意であり、「——」は「明神」。『民談記』の翻刻諸本は「——」を「大明神」としているが、「大明神」の場合には、

一 南田 龍王大明神

（中略）

一 高江 立川大明神

（中略）

一 海士 二所大明神

のごとく明記しており、また、内海については別に「免宮」の条があり、そこでは「高草郡内海村」に「免宮」が存し、「大免明神」を祀ると見えるから、「内海 大免——」の「——」は「明神」を意味していることになる。

小泉友賢の『稲葉民談記』に遅れること百年余、江戸時代における因幡之地誌の双璧とされる『稻羽志』<sup>2</sup>が成った。寛政七年（一七九五）著者鳥取藩医安陪恭庵（一七三四—一八〇八）は時に六十一歳。その生涯をかけた労作であった。本書の「神社考」附録式外神社（十七座）の中に、

白兔神社（高草郡）

白兔神社（八上郡）

が見え、「郡郷」八上郡の条には、

百井村

戸数十四軒

氏神白兔大明神 在福本村「祭日

池田村

戸数四十三軒

氏神白兔大明神 在<sub>二</sub>福本村<sub>一</sub>祭日

福本村

戸数三十二軒

氏神白兔大明神 祭日

下門尾村

戸数十九軒

氏神白兔大明神 在<sub>二</sub>福本村<sub>一</sub>祭日

上門尾村

戸数四十四軒

氏神白兔大明神 在<sub>二</sub>福本村<sub>一</sub>

とあって、福本村（現鳥取県八頭郡郡家町福本）の白兔神社白兔大明神を氏神とする五村計一五二戸が存していたのである。

右の白兔神社白兔大明神について、『稲羽志』郡郷（八上郡福本村の条）には、

池田村ノ上<sub>ニ</sub>八町計リ門尾川ノ北ニアリ庄郡家ニ四町程也當処白兔神社ハ高草ノ内海ノ白兔ノ神ヲウツシ祭ルト云フ當郡曳田ノ郷ニ八上姫ノ鎮座アル故ト云ヘリ<sub>神社考</sub>神廟ニ村ヨリ辰巳田土ノ中ニアリ

と記されており、高草郡内海村（現鳥取市白兔）の白兔大明神を遷し祀ったものと言われていること、遷座の理由は、八上郡曳田郷に八上姫が鎮座している縁によって同じ郡内に祀ることにしたのだという伝承を紹介している。

同じ八上郡内というのは確かではあるが、曳田と福本は因幡一の大河千代川を挟んで全く離れた位置にあり、何故福本でなければならなかったかという説明にはなっていないのではあるまいか。曳田郷に八上姫が鎮座している縁で曳田郷に白兔大明神を遷し祀ったとしたのなら十分理由があったといえるであろう。

また、『初稿八頭郡誌』は、「古伝に其時菟大穴牟遲神に随て来る」と述べて、八上姫求婚の折、ウサギも大穴牟遲に随って八上郡にやって来たからであると言っているが、右の「古伝」が何を指しているのか不明である。

いずれにせよ、安陪恭庵が調査した十八世紀後半の時点では、高草郡内海村の「白兔神社」「氏神白兔大明神」は「戸数六十軒」を有するにすぎなかったのに対し、八上郡福本村の「白兔神社」「白兔大明神」の方は氏子一五二戸の勢力を有していたのである。

ちなみに、『鳥取縣神社誌』によれば、福本の白兔神社は大正三年（一九一四）二月十日に現郡家町宮谷の賀茂神社に合祀され、形の上では消滅したことになっているが、福本の人々は同じ場所に小祠を建立して今に祀っている。なお、遺存する石の鳥居には、

安永五<sub>丙</sub> 歲十一月吉祥日 施主五ヶ村氏子中  
とある。この場所は『稲羽志』神社図絵（白兔大明神之図）に描く場所と同じである。

『慈住寺縁起』や『城光寺縁起』が天照大神を導いた神を猿田彦から白兔に変更し、

其天降らせ給へる時道知せし白兔見えざりける尤白兔は月読尊の神躰なればなり其後是有道祖白兔大明神と云ならわし祀神として此中山の尾続四力村の氏神と崇む  
（『慈住寺縁起』）

と記したのは、右のごとき八上郡福本村の「白兔神社」「白兔大明神」が存したからに他ならないであろう。

これらの『縁起』には、いわゆる「古事記の白兔」には全く触れられていない。すなわち、因幡国において「古事記の白兔」とは別の白兔が「道祖白兔大明神」と呼ばれ、「祀神として此中山の尾続四力村の氏神と崇められていたことになる。

## 八

中山の麓に連続して存する百井村・池田村・福本村・下門尾村・上門尾村の共通の氏神白兔大明神は、高草郡内海村（現鳥取市白兔）の白兔大明神を遷し祀ったとも言われていたが、すでに見たごとく、その根拠は甚だあいまいなものであった。しかるに、慈住寺や城光寺の縁起によれば、中山の麓に連続する村々の氏神が白兔であることは、十分納得できることになるのである。

『最勝寺縁起』を利用し、それを書き変えた人物は、かつて最勝寺の僧であり、後に慈住寺の住職となった西明であったと考えられるが、その時西明が全く彼個人の考えで新しい白兔伝承を創作したのであったろうか。

『縁起』が白兔を登場させながら、『古事記』による著名な伝承に全く触れていないのは、中山の麓に連続する村々の氏神白兔大明神が現鳥取市白兔の白兔神社より遷されたとする伝承よりも、『縁起』のごとき伝承が村々に強く存したからではなかったか。「道祖・白兔大明神」と呼ばれていたとするのは西明の創作ではあるまい。もし白兔が「道祖・白兔大明神」と呼ばれていたことが事実であるならば、『縁起』に見えるような伝承が村々に存してはなくてはならないであろう。思うに、西明は慈住寺の縁起を作るに際して、村々の伝承を採録したのである。

最勝寺・慈住寺・城光寺・百井村・池田村・福本村・下門尾村・上門尾村などは全て霊石山を中心とする中山一帯の山麓に位置しているが、池田の古老の談によれば、門尾の山を中山、池田・福本の山を横山、片山の山を霊石山ということであるが、『稲羽志』郡郷、八上郡霊石山の条には、

土俗此山一國ノ中央ニ在テ是ヨリ四方ノ境ニ至テ七八里ト云リ

とある。『最勝寺縁起』にも「此山國の中央にありて最も勝れたるの地」と記されており、霊石山を因幡國の中央に存する山としているが、『慈住寺縁起』は「此山は國の中央に在り因茲中山といふ」と述べ、『城光寺縁起』も「此山ハ國の中央に在り因て中山と号し」という。すなわち、中山は在地の人々には因幡の中央に存するゆえに中山というのだと信じられていたのである。

ちなみに、伯耆国中山郷について『上中山村郷土誌』が、

この東積の地を一の郷名にて山陰道八ヶ國の中央に當りまた伯耆一國六郡の中央即ち八橋汗入の郡境なれば畏くも元弘の帝船上山に行在し給ふ時正北を見下しこの景色を愛でさせ給ひ國の中山と詔給ひしより中山の郷と改めたりといふことも語り伝へり当社の大祭祝詞にも足乳女乃母来乃國國の真中中山乃真秀大森乃神奈備尔神乃御代与里大宮柱太敷立氏國乃鎮米止鎮里座須云々と書き來れる也（「東積」は現鳥取県中山町東積。「元弘の帝」は後醍醐天皇。「当社」は中山神社。）

と中山の由来を述べており、この中山郷にも白兔伝承が存することは興味深い（拙稿「伯耆の白兔説話考」）。

最勝寺・慈住寺・城光寺・百井村・池田村・福本村・下門尾村・上門尾村のうち最勝寺のみは現河原町片山に存するが、他はすべて現郡家町に存する。これらは古くはみな八上郡に属しており、いわば、現郡家町はいにしへの八上郡の中心部であり、また、因幡一國の中央と考えられていたのである。

「郡家」の地名は江戸時代のはじめに見えるが、古代の八上郡衙（郡家）に由来するとも、地形から発生した「高下」（因幡では「高下」とは高所となっていて水の不便な地をいう）の転ともいわれる。昭和五十六・七年の発掘調査によれば、郡家町万代寺遺跡が八上郡衙跡とされ、近くの土師百井には七世紀後半白鳳時代の建立と見られる土師百井廃寺が確認されるなど、この地が八上郡の中心部であったことを推測させる。

『延喜式』によれば、因幡國には七郡が存したが、八上郡の十二郷が最多である。仮りに一郷を五十戸として単純計算してみると六百戸が存したことになり、人口の点でも八上郡が最も多かったものと考えられる。

また、郡家町内の古墳は四百基を越えているが、中でも米岡古墳群（六十九基）、池田古墳群（五十六基）、福本古墳群（六十七基）などは大規模なものとして知られる。更に、今は河原町稲常に属するが、稲常古墳群（七十五基）も霊石山の麓に存し、かつては八上郡に属していた。これらの古墳群の前方に郡家町万代寺の八上郡衙、土師百井廃寺が位置している点注目すべきであろう。

米岡二号墳には線刻画が見えるが、一九九四・五年における郡家町福本の福本七十号墳の発掘では国内ではじめて朝鮮半島との交流をうかがわせる青銅製の匙（さじ）が出土、その下層からは金メッキを施した金銅製馬具の金具二十点も発掘され、金色白金色の美しい光沢が当時の輝きをしのばせている。馬具の発掘例は多いが、そのほとんどは鉄に金を塗った鉄地製品であって、金銅製品は鳥取県内では鳥取市六部山一号墳や米子市石州府遺跡などで発見されているのみである。

福本七十号墳は七世紀前葉中期とされ、『記』『紀』の時代にきわめて近く、更に、最近変形八角形墳であることが明らかになったが、同じく変形



八角墳である国府町梶山古墳とは近接している。わが国における八角形墳の多くが天皇陵であることは知られているが、福本七十号墳はきわめて注目すべきものであろう。

また、これより先、一九九二・三年における郡家町山ノ上の山ノ上通山遺跡群の調査では、七世紀半ばから八世紀初頭と見られる三基の窠状遺構が確認された。山陰地方では鳥取市生山の生山大池遺跡で発見された一例があるが、窠状遺構は製鉄用に使われたものと考えられている。

以上、霊石山、中山山麓を中心とする一帯が、古くは八上郡の中心地であり、因幡国の中央に存したと考えられるが、その中山に『古事記』のイナバノシロウサギとは別のイナバノシロウサギが棲んでいたとする伝承の白兎はいかなる白兎であったのであろうか。

## 九

ところで、『古事記』においてウサギが現れたのは「稲羽」の「気多之前」「気多前」であったが、「淤岐嶋」に棲んでいたというウサギが「稲羽」に渡ってなぜ「稲羽之素菟」と呼ばれるのであろうか。「オキノウサギ」ではないのか。『古事記』はウサギは「菟神」すなわち神であるというが、『古事記』の文脈に従えば、「稲羽」の「菟神」すなわち因幡の神であるということになるであろう。

ウサギがオキノウサギ、オキノウサギガミとなぜ書かれていないのか甚だ不審としなくてはならないが、思うに、ウサギがもともとイナバノウサギ、イナバノカミであったからではあるまいか。

『古事記』の所伝はウサギが神であり、その神が大穴牟遲とその兄弟を試す物語であると見るべきことは、すでに、拙稿「因幡の白兎説話考」「兎神考」において述べたところである。すなわち、ウサギが告白したワ二との物語は事実ではなく、全くのウサギの創作であり、裸にされて泣いていたのも神の化作自演であって、神が大穴牟遲とその兄弟を試さんがために因幡の海岸で待ち構えていたということである。

『古事記』は隠岐島に棲んでいたウサギがなによえに海を渡って因幡国に行かんとしたかという、最も重要なことに全く触れていない。例えば、

『塵袋』所引の『因幡ノ記』は、高草郡はもと竹草郡であって、竹の中に棲んでいた老兎が洪水によってオキノシマに流されたので本所に帰ろうとしたのだと述べ、伯耆の白兎説話においては、木の枝に乗ったまま流されたウサギが隠岐島にたどり着き、故郷の伯耆に帰らんとしたという。また、隠岐島のウサギ伝承でも、春になってもまだ雪をいただいて白い大山をはるかに見て、あそこへ渡って行きたいと思ったとある。しかるに『古事記』がその理由を述べないのは、ウサギが因幡国の神であり、もともと因幡に棲んでいたからではなかったか。因幡国を守るべき神は因幡を離れて隠岐へ行くことはできないのである。俗説にも見えるように、国を守護する神々は、出雲大社に集まるとされる神無月（陰暦十月）以外には国の外へ出られないわけである。ただ、俗説とはいえ、平安時代の『和歌童蒙抄』（一一八一—一二七〇の成立か）に記されている説であるから、かなり古い俗説なのである。つまり、因幡の神たるウサギは、ひとときも因幡を離れたことはなかったということになる。それゆえ、大穴牟遲が因幡国へと八上比売求婚の旅に出た時、因幡の神は大穴牟遲が因幡の国に入ったところで待ち構えていたわけである。

『古事記』のいう「稲羽」の「気多之前」は因幡国高草郡内海村（現鳥取市白兎）の気多ヶ崎であるとされているが、出雲から伯耆を経て因幡に入る時の伯耆国と因幡国の国境は気多郡である。現鳥取市白兎の気多ヶ崎は古の気多郡と高草郡の郡境地帯にあったから、もとは気多郡に属していたのかもしれない。あるいは、「気多之前」は現在地ではなく、気多郡内の別の地ではなかったであろうか。イナバノシロウサギの伝承地とされる現鳥取市白兎には、『古事記』に記す「淤岐島」「気多之前」（気多前）が現存するが、恐らく後の名前であろう。その他の伝承についても、伝承地を現鳥取市白兎に特定するのは比較的新しいことであった事実について拙稿「因幡の白兎説話伝承地考」において論じたが、伝承地の中心にあるのは「気多之前」である。『古事記』は「気多之前」の地を特定していないが、『塵袋』第十は『因幡ノ記』を引いて高草郡とする。

しかしながら、「気多之前」は気多郡に存すべき地名であり、「気多之前」は伯耆と因幡の国境になくはならない。なぜならば、因幡の神であるウサギは、大穴牟遲が因幡国に入ったところで待ち構えていたからである。

いにしえの気多郡において最も特徴的な岬は、現気高郡青谷町と気高町の境界をなす長尾鼻であつて、基部より一・八キロメートルも日本海に突出する長大な岬である。長尾鼻はちょうど鳥の長い羽根に似ているところから名付けられたといわれ、岬先端部は七十メートルを越す絶壁となっており、福井県東尋坊に似た地形をなしている。推測にしかすぎないが、『古事記』の「気多之前」の候補地であらう。

『稻羽志』郡郷、高草郡下、内海村の条において、安陪恭庵は、

気多カ寄 杖<sup>ヘ</sup>衝坂ノ海ニ突出タル山鼻ヲ正木<sup>カ</sup>端ト云フ気多カ寄是ナリト云リ又ノ名神向神下共云ト云リ

と記している。すなわち、現鳥取市白兔の「気多ヶ崎」は「正木<sup>カ</sup>端」「神向神下」と呼ばれていたのであつて「気多カ寄是ナリト云リ」と述べているにすぎない。それどころか、

或説ニ気多カ寄ハ酒ノ津ノ海辺ナラント云<sup>ヒ</sup>又母木中ノ坂大寄ノ事ナラント云リ

とも言つて、全く場所の異なる「酒ノ津」（現気高町酒津）や「母木」（現気高町宝木）説さえ挙げた後、結局、

遙神世ノ名迹今何ヲ證トテ其是非ヲ可レ定舊事紀ノ所謂白兔ノ於岐<sup>ハルケキ</sup>寫ヨリ和途<sup>ツニ</sup>ノ背ヲ踏テ気多カ寄ヘ飯ルト在ハ土人ノ口碑其文ニ合レハ此ニヤ従フヘキカ

と結んでいるのである。

恭庵の見るところ、伝承地「気多カ寄」については、特定しうる根拠は何もなく、『旧事紀』の所伝と「土人ノ口碑」との合致をもってこれを採用しようとしていたのであるが、それでもなお、「此ニヤ従フヘキカ」と半信半疑だったのである。

## 十

『古事記』のウサギは「気多之前」に現れたが、それは恐らく大穴牟遲を迎えるために、伯耆と因幡の国境、伯耆国から因幡国へ入った最初の気多郡の気多之前まで出ていたということであらう。ウサギは気多之前に棲んでいたのではあるまい。それではウサギが棲んでいたのは因幡国のいず

こであつたか。

因幡国の神であるウサギが棲んでいるとしたら、その地は因幡国の中央であり、国の中心部であつて、ウサギの伝承を存し、ウサギを祀る神社が存する地であらう。そのような条件を満たす地は正に八上郷であり、現郡家町の中山一帯以外にはないのである。中山に棲んでいたウサギがなにゆえ「道祖白兔大明神」という神でありえたかといえ、因幡の中央たる中山に居していた因幡の神であるとして祀られたということではないであらうか。

したがって、因幡国の神たるウサギが棲んでいたのが八上郡であつたとするならば、八上比売と大穴牟遲の結婚を予言したのは別に不思議でも何でもないことになるであらう。その八上比売が郡家町に住んでいたとする口碑がある。福本の古老は八上比売と大穴牟遲は郡家町で逢うことになっていたのだという。

神話上の人物とはいえ、八上比売がもし存在していたとすれば、彼女が八上郡の豪族の女であることは確実であつて、してみれば、八上比売が郡家町に住んでいたとする説もあながち荒唐無稽な話とはいえないであらう。『古事記』は大国主の兄弟が大国主に国を譲った理由は「避りし所以は」といってウサギ伝承を記している。すなわち、大穴牟遲が「稲羽之八上比売」を得ることによって「稲羽」を得て大国主となったということで、古代において、女性を占有することがその地を占有することを意味していたことはいうまでもない。したがって、因幡国を代表する女性である八上比売が因幡国の中央（中心）に住んでいたと見ることは十分な理由があるのである。

現在は、八上比売は現河原町曳田（古の八上郡に属する）に住んでいたとされ、曳田に存する売沼神社が八上比売を祀るとされている。しかし、小泉友賢の『稲葉民談記』巻十四、神社之部、免宮の条に、

又八上姫ノ神社モ當国ニ有ルヘケレ<sup>ヒ</sup>今何レノ地ニ有リト云<sup>ヒ</sup>又<sup>ヒ</sup>不聞とあり、同じく「神社之部、八上郡十九坐」の一つとして「賣沼<sup>ヒメヌメ</sup>ノ神社」をあげ、

右ノ神社氏國中ニ問尋タレ<sup>ヒ</sup>明カニ知ル人ナシ若クハ其名ノ少シモ似ヨリタルヲハアゲテ是ヲ記シツク

と記している。『延喜式』巻十、神名下には「八上郡十九座」の一つとして「売沼神社」の名が見えるが、これが八上比売を祀ったものかどうかは不明だったわけである。曳田の地における神名としては、『民談記』巻十四、神社之部、當国郡中村々本社氏神記の条に、「曳田 ニシノヒ 天王」とあるのみである。

ところが、後に安陪恭庵はその著『稲羽志』歴世考卷之一、稲葉八上姫の条において、

八上姫ノ神迹ハ八上ノ郡曳田ノ郷曳田村ニアリ神號西ノ日天王延喜式  
神名帳ニ載レ之売沼神社是ナリ

と断定してしまったが、その根拠は同じく曳田村に存することと「売沼神社」は「按ニ売ノ字ノ上ニ比ノ字有リシヲ延喜式ニオトセリトミユ」というにすぎず、根拠なきに等しいが、現在では八上比売を祀る売沼神社と認められ、神社入口には「式内社八上売沼神社由緒」と大書する案内板が建てられている。

「売沼神社」は「比売沼神社」の誤りで、「比」字を脱落したのであらうとする安陪恭庵の説も苦しいが、「売沼神社」の文字の上に「八上」を付し「八上売沼神社」とするのは更に苦しいであらう。『延喜式』神名帳では、ヒメは「大穴持海代日女神社」(出雲国)、「新具蘇姫命神社」(石見国)、「由良比女神社」(隠岐国)、「比売神社」(越中国・和泉国・豊前国)、「手速比咩神社」(能登国) などとあり、「売布神社」(丹後国) は「メフ」「ヒメフ」の傍訓を有し、「売沼神社」には「ヒメヌ」「ムヒヌ」の傍訓を有する。鎌倉時代初期とされる九条公爵家本は「ヒメヌ」としているが、この傍訓がどこまでさかのぼれるのか不明である。また、曳田に存する前方後円墳「嶽古墳」は現八頭郡内最大の古墳であって全長五十メートル。売沼神社の裏山にあり、これを八上比売の墓とするが、この古墳の主は古の八上郡の男性豪族を葬っているものと見るべきであらう。

福本の白兔神社は大正三年に現郡家町宮谷の賀茂神社に合祀され、形の上では消滅したことになっているが、この時宮谷に御神体(小仏であった由)を運んだ村人五名が次々に没したと伝えられている。その福本の白兔神社の社殿は現在郡家町青龍寺(もとの城光寺)本堂にそっくり保存せられているが、江戸期の豪壮な建築として知られ、正面虹梁上の臺股には大

波にとびはねる見事なウサギの彫刻(波ウサギ)がある。また、福本のもとの地には安永五年(一七七六)十一月の年紀が刻まれた石の鳥居があり、「施主五ヶ村氏子中」とあって、「白兔神社」の額がかけられている。鳥居は昭和十八年の鳥取大震災の折崩れたが村人が後に同じ位置に組み直したもので、大震災の時に割れた額は福本の小祠に残し、新しい額をかかげたのである。

福本の古老の談によれば、幾度か本殿の返還交渉を行っている由であるが未だ実現するには至っていない。しかし、村人たちが現鳥取市白兔の白兔神社の社殿や鳥居よりも、福本村の社殿や鳥居が立派で古いものと考え、鳥取市白兔の白兔神社よりも福本の白兔神社の方が格が上であったのだと語っていることは軽々に見過せない。現鳥取市白兔の白兔神社の鳥居は昭和三十七年と昭和四十三年の建立で全く新しく、福本の安永五年の鳥居には及ばないし、本殿の基段の大きさも五メートル八センチ×五メートル六十センチで全く同じ。福本の白兔神社の由緒は古いとみてよいであらう。

#### 注

(1) 小泉友賢『稲葉民談記』。鳥取県立図書館所蔵写本。題簽『稲葉民談記』。内題『稲葉民談』。年紀はないが近世末の写本であらう。原本に忠実な書写と認められる。『民談記』の引用は全て本書による。なお、原本は享保五年(一七二〇)焼失。

(2) 安陪恭庵『稲羽志』。鳥取県立図書館所蔵文政九年(一八二六)写本。題簽『稲羽志』。内題『因幡誌』。丁寧な筆であり、原本に忠実な書写と認められる善本。『稲羽志』の引用は全て本書による。

(平成七年十月二十五日受理)